

平成 22 年度 海外研修派遣 報告書

東京慈恵会医科大学附属第三病院 高村公裕

1. あなたがこの研修に求めたものとその結果

米国の医療現場で診療放射線技師の立場、放射線診療の実際について学び、今後診療放射線技師として何をすべきか。また、世界の最先端技術を知ることで自分の方向性や進むべき道を見出せないかと考え今回の研修に応募した。一週間という短い期間であったが自分にとって、観るもの・聞くこと全て刺激的でとても有意義な時間であった。「百聞は一見にしかず」是非とも今後、若い方に経験してもらいたいと思う。

日本の技師制度と大きく異なる点は、米国では 2 年毎に資格の更新がある事で、講習等を受けて常にスキルを一定水準以上に保つ意味で日本でも必要だと感じた。また、技師免許の他にモダリティ毎の免許があり、専門性・理解度が高まるごとに繋がるものと考える。気になった事として、他のモダリティとあまり交流が無い事、静脈注射はできるが造影剤ショックがあったときの対処法についてのトレーニングは受けておらず、医者と看護師を呼ぶだけだという事である。ワークシェアの概念が強く、自分の仕事はここまで範囲といった割り切った考えが日本とは大きく異なると感じた。個を尊重するか和を尊重するか国民性の違いが垣間見られた。物の見方は様々でどちらの制度がよいかは判断しかねるが、米国とのよい点を取り入れ日本の技師制度をより成熟させていく事が重要でないかと考えた。

2. 日本と米国との医療に関する違いについて

保険制度は大きく異なり、米国では加入している保険のランクで受けられる医療が違い、スタンフォードは最高ランクの医療保険を払っている人しか受けられないという。先進国で唯一全国民に保険が与えられない国であり、約 5000 万人の人が無保険である。オバマ医療改革でも約 1800 万人が無保険で取り残されるとの事であった。医療水準が高いのに医療制度のランクが低いというギャップを感じざるを得なかった。

3. 最も印象に残ったこと

7. OTMRI の見学、磁場体験が最も印象に残った。まだ臨床に使用する段階ではないが、神経イメージング等 10 年以内には臨床で使用できるまでにするという GE 技術者の力強い言葉が心に残った。

4. 研修で得たものを今後どのように生かすか

短い研修期間であったが、志を共にするかけがえのない仲間と出会った事、毎日夜遅くまで討論し親睦を深め会えた事は自分にとって今後の財産であり大きな刺激となった。現在、医療のグローバル化の波があり、メディカルツーリズムなど国境を越えた医療が盛んに行われている。今回、研修で学んだことや経験したことを臨床・研究・教育面で世界に通用する技師を目標として、今後に活かしていくとともに後輩や同僚にフィードバックしていきたいと考える。

最後になりましたが、本研修にご尽力頂いたスタンフォード大学、日本放射線技術学会関係者の皆様、GEHC-J の皆様、引率していただいた九州大学の西川様、松原 醫技師長を始めとする東京慈恵会医科大学附属第三病院 放射線部の皆様に心より感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

STANFORD HOSPITAL&CLINICS 前の噴水にて
中段 両手ピースが筆者

